

オードレイ夫人の150年

——（コン）テキストを超えて——

栗 野 修 司

“Justice to the dead first, [...] mercy to the living afterwards.” (158)
「まず死者に正義をもたらせ、生きている者に憐れみを施すのはその次だ。」

Mary Elizabeth Braddon の *Lady Audley's Secret* (1862) が出版されてから150年以上が経過した。キャノン（正典）が意味を持ち、厳然として存在したふたつの大戦を含む半世紀あまりの間等閑視されながら、1980年代に至るや、フェミニズムがブラッドンのテキストに脚光を当て、その後現在に至るまで、様々に語られ、読み継がれている。⁽¹⁾この現象は彼女の作品が、キャノンと裏腹の関係であることを示している。キャノンが輝きを放っている間は、ブラッドンは闇に隠れてその存在は目立たないが、キャノンが輝きを失うと、彼女の作品はきらめき始めて、無視できなくなる。いわばキャノンに対抗するような存在なのだ。実際、ブラッドンのテキストはキャノナイズされたものに対抗し、キャノンによってその権威が保証されているもの、例えば、家父長制度や男性規範やコンベンションに挑戦し、それを攪乱しようとするものだった。作者や語り手の権威を軽視し、意味の決定に読者が参加するような読みを可能にするという点でもキャノナイズされたテキストとは異なっていた。『オードレイ夫人の秘密』というテキストは、テキストと文脈（コンテキスト）の枠からはみ出た読みを期待させる、特異な小説であった。

『オードレイ夫人の秘密』というテキストに内在する男性規範への関心をふまえつつ、このテキストが「今」と「ここ」に頻繁に言及していることに着目し、19世紀中盤の様々の正典や規範や慣習 (3c's=canons, codes, and con-

ventions) の正当性を問い直す、あるいはその欺瞞を告発するというブラッドンの対抗的な姿勢をこの過激なテキストに読み取りたい。そのような読みのためには、消費^{コンシューマー・カルチャー}者文化をコロニアリズム (plus 2 c's=consumer culture and colonialism) の批判に転換する彼女のテクニックを理解しなければならないということを付け加えておく。

I

センセーション小説の特筆すべき点はその共時性である。センセーション小説は時間を読者と共有している。センセーション小説の祖^{アーキタイプ}型であるゴシック小説が「距離の魔法」(ロマンチックな性向の持ち主は、時間的に現在から、地理的に「ここ」から遠い時代 [中世] と場所 [イタリア、スペイン] にあこがれた) を最大限に活用しているのに対して、センセーション小説は今現在それが物語ることが「ここ」で起きているという点を読者に執拗に確認、再確認させる。ここで注意しなければならないのは、21世紀の読者は150年の時間のギャップを克服して、1860年代に生きる自分を想像しなければならないということだ。150年前のセンセーション小説の読者はその登場人物と同じ時間を共有していた。テキストにはエセックスのチェルムズフォードやブレントウッドやロムフォードという実際の地名が頻繁に出てくるし、「城館^{カースル・イン}亭」のあるマウント・スタニングは現実のマウント・ネシングだとすぐ分かるように書かれている。城館亭のモデルは現在も存在する「プリンス・オブ・ウェールズ」⁽²⁾、ブラッドンのオードレイ館^{コート}は、ブラッドン自身が訪ねたことのあるインゲイトストーン・ホールをモデルにしている⁽³⁾ということは同時代の読者の共通認識であった。かくして、地理的な指標を道案内に読者はこの小説の舞台を現実として認識できる。

読者と登場人物は時間も共有する。いささか煩わしいが、テキストの共時性を強調するためにブラッドンが配置した指標の例を挙げる。「北部諸州の人たち (Northern Yankeedom) は殺したり殺されたりしているが、そんな時にも怒りで荒れ狂う北部人が南部人の胸に飛び込んで赦したり赦されたりしてほ

しいと思わざるをえない」(292-3)と語り手は南北戦争(1861-65)に触れて希望を述べる。この作品が連載されているとき、南北戦争は始まったばかりであったから、これはテキストの「今」を強調する役割をはたしている。“Yan-keedom”(「ニューイングランド人」)という単語は1851年の造語であったという事実もテキストの臨場感をさらに強める。また、ジョージがオーストラリアから戻るときに乗ったとされる「快速帆船アルゴス」号⁽⁴⁾も、二度目のオーストラリア行き(実際にはカナダだったが)にジョージが使ったとロバートが考えて、リバプールまで行き乗客名簿を確認した「移民船」の名前が「ヴィクトリア・レジーナ」号となっているが(98)、この船も実際に存在し、1850年代からリバプールとオーストラリアを結ぶ航路に就航していた(“The Ships List”⁽⁵⁾)。ロバートの愛用するトルコたばこも時代の指標である。トルコたばこはクリミア戦争(1853-56)に参戦したイギリス兵とフランス兵が終戦後故国へ持ち帰った趣味で、その後フィリップ・モリスがこれをイギリスとアメリカ市場に出した(Rodu)。彼がたばこを吸うときに使うパイプはメアシャム・パイプである(38)。“meerschaum”が英語の文献に現れたのは1784年。トルコのエスキシェヒルで産する「海泡石」のこと。繊細な彫刻を施してパイプに使われ、ヴィクトリア朝の中期まで珍重された。

ルーシーの愛用する時計が「ルロイ」と「ベンソン」であることも明らかにされている(302)。ルロイはフランスの時計メーカーで特に女性用を得意とした。ベンソンは1847年創立のイギリスの時計メーカーで、軍の御用達だった。ブラッドンのテキストにはこの当時の人気商品がまるでカタログ・ショッピングのように網羅されていて、それは時間の共時性という観点から論じることが出来るが、当時の消費者文化との関連からも論じることが可能であろう。⁽⁶⁾このように、登場人物と読者の共時的関係はプロットにテキストとコンテキストの枠を超えさせてしまう。

19世紀には生産者(男)と消費者(女)という二項対立関係が新しく発生した。消費は欲望⁽⁷⁾する女たちの意欲の表れであり、同時に男を引きつける魅力を身にまとうためでもあった。ボウルバイはこの二項対立は簡単に脱構築できると言っているが(Bolby 29)、それは彼女が考察の対象としている19世

紀末の話である。1870年の「既婚女性財産法（The Married Woman's Property Act）」制定までは、結婚によって妻のすべての財産は夫の所有となったから、所有者（男）と消費するだけで所有しない者（女）という二項対立を解消できなかった。従って、ルーシーがオードレイ館を出るときに、「インド製の肩掛けで身を包んだ。それはサー・マイケルが100ギニーで買ってくれたものだった」（373）というパセッジについて、「彼女のような他人の名をかたって上流社会へ入り込もうという女の身分を示すものは当然ながら市場から買ったものだった」という読み方もある（Daly 28）。つまり、ルーシーは出自が貧しいので親から相続したものをほとんど持たないという暗示である。しかし、この（コン）テキスト外の「既婚女性財産法」を考慮すると別の解釈が可能になる。上に述べたように、この法律が施行されるまでは、既婚女性の財産は自動的にその夫の所有になった。つまり、ルーシーが巨万の富を相続していたとしても、離婚したら無一文で婚家を出る羽目になっていたのだ。貴族の生まれであれ、労働階級の生まれであれ、女性は結婚によってその財産をすべて失った。結婚後の女性は「囲われもの」と何ら変わることはなかった。1857年7月15日にカウンプル（インド名、カーンプル）で起きたイギリス女性や子供の虐殺が「貴婦人たちの屋敷」と呼ばれたイギリス人に囲われたインド女性の屋敷内でおこなわれたことはその意味で象徴的である。イギリス国内でのイギリス女性とインドの女性の対応関係を暗示していると考えられるからである。消費される者としてのルーシーは、植民地の人達と意図せずして連帯関係にある。

ラファエル前派によるルーシーの肖像画は女性が消費する側でもあり、消費される側でもあるということを示している。そしてそれは自己愛^{ナルシズム}。彼女が年を取ることを恐れるのはその証拠（『『わたしもいつか年を取るのかしら。 [...] 年を取ったときわたしはどうなるのかしら。』』 [105]）。自分の姿を肖像画の中にとどめて、時間を停止させるのもその証拠。自分を飾るという行為は自己愛の表現でもあるかもしれないが、自分の商品価値の表象である。身ひとつしか、1870年以前の女性には「財産」はなかったのだから。その行き着くところは肖像画である。ボウルバイの考察は世紀末の消費文化を対象として

いるから、ジェンダーの非対称性を考慮しないが、1860年前後には男女に消費する者とされる者という非対称性は明らかに存在した。同時代の女性読者はそのようなこともテキストに読み込んだであろう。

マニング夫婦の殺人事件にも言及されている。この事件は1849年に起きた。『オードレイ夫人の秘密』の読者との共時性は少ないと思われかねない。しかし、ブラッドンは巧みに共時的であることをにおわせる。その方法は少し手が込んでいる。(優れた)小説が持つ過去を再現する能力に依存したのである。つまり、『オードレイ夫人の秘密』の前年に発表されてベストセラーとなった、ウィルキー・コリンズの『白衣の女』で言及されることによって(220)、10年以上昔のマニング事件が「アップデート」されて、センセーション小説の読者にとっては「今」の事件となったであろう。彼女はちゃんとそれに乗って、10年以上前の事件を現在であるかのように言及したのである。しかもマニング夫婦の妻は貴族の召使いであったし、夫はパブの主人であった。『オードレイ夫人の秘密』では、この事件がパブで言及されること、フィービーは貴族の召使いであったこと、ルークがパブの主人であったことなど、二重、三重に積み上げられ重ねられた類似性と自己言及性は、マニング事件がまるでこのテキストの中で起きている事件であるように語るという効果をもたらす。それをロバートの言葉が補強する―「わたしはね、信じているのです、僕らは気づかないまま、犯罪の臭いがぶんぶんするところへ足を踏み入れながら、それを意識しないで、自由に呼吸をするのです。ほほえんでいる人殺しの顔に見入りながら、その落ち着いた美しさを賞賛することもあるとも信じています」(141)。「今」と「ここ」を読者に意識させるための準備は周到にされている―『オードレイ夫人の秘密』では語り手は過去へ戻って物語を展開することはない。過去を振り返るのは、登場人物の思い出話に限定されている。

「いま、ここ」を背景に展開する『オードレイ夫人の秘密』の時間は必ずしも連続的ではない。過去と現在が明確な断絶で隔てられている。センセーション小説の「4点セット」のひとつ、変装/他人に成り代わることによって、過去との決別を図るわけだが、その典型がルーシー・グレアムである。この名で彼女を呼ぶことは適切ではないかもしれない。彼女は名前を変えるたびにアイ

デンティティを変えてきた。しかも、名前を変えること＝アイデンティティを変えることは、同時に過去との決別でもあったのだ。彼女がアイデンティティを変え、それによって過去と決別する。その成功が彼女自身の独白によって、生々しく物語られている――

「もう人に頼らなくていいのかわ、もう骨折り仕事をしなくてもいいのかわ、もう屈辱を味わうこともないのかわ。昔の生活の痕跡は全部消えてなくなったし。わたしが誰か明らかになる糸口は全部埋めて隠してしまって、忘れられた (every clew to identity buried and forgotten) し、これだけ、これだけを除いては。」(12)

ルーシーの独白は、サー・マイケルの結婚の申し込みに続いている。やがて家庭教師ルーシー・グレアムはオードレイ夫人となるのである。名前が変わると同時にそのアイデンティティも変わり、過去と決別するという「3点セット」がここに凝縮している。ルーシーは「もう～なくてもいいのかわ (no more)」を三度繰り返している。単純な繰り返しによってここで言及されている「人に頼ること」、「骨折り仕事をする事」、「屈辱を味わうこと」を彼女がどれほど嫌ったかということが強調されている。「埋めて隠してしまって」と訳した箇所原文は buried である。最初の彼女のアイデンティティであるヘレン・モールドン（実は別人の遺体）がこの時点で実際に埋葬されていることを知れば、この単語には辞書的な意味とは別に、コンテクストを踏まえたときに持つ重要な意味が含まれていることに読者は気づくだろう。『オードレイ夫人の秘密』の読者はこういう「言葉遊び」に何度も出会う。

『オードレイ夫人の秘密』の第一章と第二章は見事につながり、重なっている。ルーシー・グレアムがサー・マイケルの求婚を受け入れたその時間に、彼女の胸に付けていた過去との唯一のつながりである指輪の贈り主である彼女の夫は大西洋上の船に乗っていた、イングランドへ向けて。センセーション小説の読者は、これらの連続するふたつの章に描かれる出来事が同時進行で起きていると理解しながら読んだであろう。そして、同時進行するふたつのエピソード

ドに読者は全く対照的なものを読み取る—過去と決別したい女、過去の絆を唯一のよりどころとする男、苦労を嫌悪する女、労苦をいとわぬ男。このジェンダーの非対称性を読み落とすべきではない。

一方で、男のアイデンティティは変わらず、従って過去と決別することもない。いや、むしろ過去にこだわる傾向があるのではないか。ロバートの口癖は「鎖、連鎖」(chain, link)である。鎖は時間をつなぐだけではなく、人と人をもつなぎ、事件と事件とをつなぐ—

ヘレンが（ウェルドンシーの父親の元を）出奔したのは、父親の手紙によれば、1854年の8月16日だった。トンクス嬢はルーシー・グレアムがクレセント・ヴィラの学校に現れたのは8月17日か18日だったと明言している。ヘレン・トールボイズがヨークシャーの海辺の町を出てから、ルーシー・グレアムがブロンプトン学校に到着する間に48時間も経過していない。これは状況証拠の鎖のとても小さな連鎖であるかもしれないが、それでも、鎖には違いないし、つじつまは合う（This made a very small link in the chain of circumstantial evidence, perhaps; but it was a link, nevertheless, and it fitted neatly into its place）。」（250-1）

こういう具合にロバートは鎖をつなぐことにこだわる。過去と現在、人と人、原因と結果は目に見えなくてもつながっていると彼は信じるからである。鎖や連鎖という言葉に拘泥し、それを元に推理する探偵としてのロバートは「空間」、「時間」、「アイデンティティ」という三要素を完全に制御し把握しようとしているようだ。引用箇所には、ヘレン/ルーシーというひとりの人物が持つふたつのアイデンティティ、8月16日から18日の間の「せいぜいで48時間」という時間、ヨークシャーとロンドンという空間、つまりロバートがコントロールしようとしている三要素がコンパクトに含まれている。彼はそれぞれの連鎖（関連）を合理的に説明しようとしているのである。合理的な説明のためには鎖はつながらなければならない。ロバートは頻繁に「鎖」という言葉を使って（「運命的な鎖（fatal chain）」[157]、「状況証拠という運命的な鎖（the

fatal chain of circumstantial evidence)」[220]、「状況証拠の鎖 (the chain of circumstantial evidence)」[259]) いるが、それは合理的であるという信念、あるいはイデオロギーに裏打ちされている。「空間」に混沌をもたらすものは外部からの侵入者であり、その根源は周縁に設定されている。ひとつの優勢なイデオロギーによって保証された空間ではすべては合理的な説明が可能なのである。合理性と混沌は相容れない。ルーシーは周縁から合理的であるべき中心に侵入しそこに混沌をもたらし、最後に周縁に追いやられる。

一方で、ルーシーは鎖を切る必要を感じている。そのために、ヘレン・モールドン、ルーシー・グレアム、オードレイ夫人という異なったアイデンティティを使い分けることによって時間の連鎖を絶とうとした。しかし、ルーシーの試みは破綻する。彼女は過去を埋めることに失敗したが、彼女の意図に反して未来を埋められてしまうことになる、ベルギーの「^{マッド・ハウス}精神病院」に生きたまま「埋められて (buried alive)」(387)。ここでも buried という単語が強く響いている。

II

ブラッドンのこの小説では彼女の植民地主義についての考えが直接には伝わってこない。イートン校出身のジョージはふたつの植民地（オーストラリアとカナダ）とイギリスの間を往復している。1851年に始まったオーストラリアのゴールドラッシュによって、イギリスからオーストラリアへの移民は急激に増えた。それは『オードレイ夫人の秘密』が出版された1861年にも続いている。この時代を特徴づけるのが移^{イミグレーション・シップ}民船である。1847年から始まり、どの船にも定員いっぱいの乗客を積んでオーストラリアへ向かった。⁽⁸⁾一方、オーストラリアからイギリスへ戻る船の乗客は少なかった (12)。このことは、エドワード・サイードが、「遠くにある場所は、使おうと思えばいつでも、小説家の思うままに、移民や一攫千金の富や流刑のような目的で使うことができる」(58) と述べたときに念頭に置いていた『ジェイン・エア』や『大いなる遺産』と異なって、ブラッドンのテキストは、植民地での成功者は少数派だと

いうことを暗示しているのである。植民地で成功して故国へ帰国する者は少数だと暗示する一方で、アルゴス号は「オーストラリア産の羊毛を満載している」(12)と書かれている。大規模資本による収奪は個人の野心よりはるかに確実かつ大規模であったという(コン)テキスト外の現実と対応している。不注意な読者は読み飛ばしてしまいそうなこの比較を無視するべきではない。植民地主義では、宗主国の個人も植民地の個人もともに支配され抑圧される存在として結びつくからである。

このテキストの第二章には、男と女それぞれのオーストリア移民の代表として、ジョージとモーリー嬢が登場する。ふたりの経験は、当時植民地へ移民した男女の多くの経験と重なる。1830年から99年のあいだにオーストラリアとカナダへ移民した2百万人のイギリス人(“Female emigration to Australia”)のうちに含まれるジョージは、植民地での一攫千金を夢見る男の、モーリー嬢は家庭教師をする女のひとりとして。さらにジョージは妻を故国に残して植民地へ赴いた60,509人の夫のひとりであった(“Conjugal Condition of the People”)。モーリー嬢がオーストラリアへ赴いたと思われる年より少し後の1851年の国勢調査によれば女性の数が男性よりも4%多かった。この国勢調査ではブリテンの総人口はおおよそ一千八百万人、そのうちの四十万人の未婚女性が「余分な女性」と呼ばれたという。モーリー嬢は婚約者がいただけでも幸運な部類の女性に含まれる。しかし、彼女は結婚資金作りのためにオーストラリアに行くことを選択した。これも(コン)テキスト外の実事—しかもこの時代を表象する事実—に同時代の読者の意識を向ける。この時代ある程度の教育を受けた中産階級の女性には本国では家政婦のような仕事しか見つけられなかった。1861年に教育を受けた女性のオーストラリア移民を後押しする記事が雑誌に連載された。マリア・ライによる『植民地の求めるもの(The Colonies and their Requirements)』がそれである。これは元々彼女がダブリンの「社会科学推進協会」の会合で発表したもので(1861年8月)、それが同年とその翌年に『英国女性誌(*The English Women's Journal*)』に掲載された。1859年にリンカンズ・イン・フィールズの近くに事務所を開いて自分の考えを実践し始めた。1861年と62年に80人の女性を移民させたとい

う。⁽⁹⁾

ブラッドン（の語り手）は第二章では自分の意見を開陳しない。ジョージとモーリー嬢に語らせるばかりである。過酷な体験は注釈や解説を必要としない。ふたりの体験はその典型である。モーリー嬢はイギリスに婚約者が待つと言いながら、少しも嬉しそうではない。妻が待つと信じているジョージの期待の大きさと好対照をなしている。これについてもテキストとコンテキストの枠の外、つまり現実を考慮する必要があるそうだと。1851年の国勢調査では女性の方が男性よりも50万人多かった。これをウィリアム・グレッグ（1809-1881）のようなエッセイストは問題視した。不道德を助長するというのである（“Female Emigration to Australia”）。（その不道德には重婚も含まれている。）結婚相手探しには女性にとって圧倒的に不利な世界が彼女を待っているのである。そればかりではない。既に30歳の半ばを超えていると思われるモーリー嬢をもうひとつ憂うべき、大きな問題が待っていた。

モーリー嬢は15年の間オーストラリアで結婚資金を貯めるために家庭教師をしたと書かれている。21世紀の読者の平均的な人生中の15年とヴィクトリア朝中盤の一般人の15年とは主観的な長さがひどく異なっている。彼（女）らの平均余命は40年に満たなかったのだから、⁽¹⁰⁾そのうちの15年は長かった。彼女に残された平均余命はわずかであった。モーリー嬢は残る数年間の結婚生活のために15年を植民地での労働に費やしたのである。この不合理に気づくためには、読者は150年の時間を超えて想像力を働かせねばならない。それによって、同時代の読者も『オードレイ夫人の秘密』というテキストを読むときに、その時代の（コン）テキストを超えた読みをしているのではないかということに思い当たる。「イングランドへお葬式に参列するために戻るみたい」（17）というモーリー嬢の言葉はコンテキストからはみ出て、現実と混ざり合ってしまうほどの深刻な意味を持って響く。既に余命の尽きたことを意識した彼女は自分の葬式を念頭に置いて、この口葉を口にしたと考えることも可能だからだ。読者は常に「今」と照らし合わせながら、このテキストを読み進めることを期待されているのだ。

『オードレイ夫人の秘密』というテキストの特徴はその「臨場感」にあると

先に述べた。具体的に言うと、時間の流れに沿って直線的に語られる物語は「家庭教師」ルーシー・グレアムが准男爵マイケル・オードレイと結婚した「(18)57年の真夏」(221)に始まり、「1861年のこの輝かしい夏」(446)に終わる。この時間のスパンは、インド大内乱(The Indian Mutiny)と、「その後」と重なる。大内乱の発端となった1857年5月10日のメーラトでのセポイの蜂起で始まり、1860年代になっても、例えば、ベストセラーとなったチャールズ・ボール、『インド大内乱の歴史』は1858年に出版されて、この時まで版を重ねていた。そういう事実を考慮するならば、テキスト内の意味は同時代の読者の体験を培養液にして、様々に増殖したと考えられる。では、『オードレイ夫人の秘密』のサブテキストとして、セポイの反乱はどのような(コン)テキスト外の意味をテキストに付加するだろうか。

この小説は探偵小説の先駆けとして広く認識されているが、探偵役のロバートは犯罪を暴いたわけではない。彼には一貫して狭義の正義感も広義の社会性にも疎かった。この小説には、出版の5年前の1857年に起きた「インド大内乱」への言及が一度あり、それによって、ロバートがこの東インド会社の雇っていたインド人傭兵(セポイ)の反乱を鎮圧する側(イギリス軍)の一員として戦ったことが暗示される――

「ボブよ、知っているかい」、とロバートはいった。「インドで負傷して、弾丸を身体に埋めたままで帰国する戦友たちのことを。ひとりだって「弾が埋まっているのさ」などと口にしない。本当に頑強な奴らだし、丈夫そうにも見える、たぶん僕らと同じくらいにね。でもどんなにわずかでも天候が変わるたびに、少しだけでも気圧が上下するたびに、古傷が痛むのさ、あそこの戦場で痛んだのと同じくらい大きな痛みがね。僕も戦傷を負って、今も弾を身体に持っているが、棺桶の中まで持っていくつもりだよ。」(49)

ロバートらしくなく、この場面では少し感傷的である。感傷的であるが、彼のインドでの体験は彼の個人的な経験に収束してしまっていて、植民地での悲劇

について彼がほとんど意見を持っていないことが明らかになる。「あの昔の苦しみ」(the old agony) という表現は「心の疼き」という意味を含んでもよさそうだが、この文脈では「古傷の疼き」で終わっている。カール・マルクスがインド人民側に立って、イギリスの植民地支配を批判したこの大内乱⁽¹¹⁾も彼には個人的な体験でしかなかったようだ、戦後5年経ってもまだイギリス国民にはトラウマとして個人の意識からも国家の歴史からも排除できない事実であったのに。あるいは、多くのイギリス人女性が暴行を受けて、それがイギリス人全体のトラウマとなったということ⁽¹²⁾もこの文脈からは伝わってこない。彼のこのような態度は社会の支配的なイデオロギーを受け入れてそれに疑問を持たぬ彼の性格を物語っている。彼の行動原理は対個人で一貫しているのである。

ブラッドンはインド大内乱に直接言及はしていないが、テキストにはインド大内乱の隠喩が巧みに埋め込まれている。『オードレイ夫人の秘密』というテキストにはオードレイ館の古井戸に頻繁な言及がある。「よどんだ井戸」(2)、「壊れた井戸」(4)、「荒れ果てた井戸」(66)、「ライムの木陰にひっそりたたずむ井戸」(276)のように執拗と言ってよいほどの数である。後に明らかになるように、ルーシーがボブを「突き落とした」井戸であり犯罪の現場であるということを割り引いても、この執拗な言及は何かの意味を持つと勘ぐらざるを得ない。実は、この時代のイギリス人にとって井戸や井戸に突き落とすというのは特別な隠喩を付与されて思い出された。

1857年5月10日にインド北部のメーラトの英軍基地で発生し、その規模をインド北部全体に拡大したインド大内乱が一ヶ月半を過ぎたころの6月27日にカウンポール(インド名カーンプル)でその悲劇は起きた。夕刻、まず5人のイギリス人男性がセボイたちに外へ連れ出され銃殺された。それに続いて210人の女性と子供が銃殺され、遺体は翌朝近くの井戸に投げ込まれた(“The Indian Mutiny”)。(27日と28日に亡くなった2,163人の兵士と女性と子供を追悼して、1859年にデリー記念碑が建てられた。) テキスト内での井戸とインド大内乱の悲劇の象徴としてのカウンポールの井戸は共通の隠喩でつながる一支配者に反逆する邪悪な者が正しい者を殺すという行為の現場として。

インド大内乱がどうやら『オードレイ夫人の秘密』のサブテキストらしいというもうひとつの手がかりとなる隠喩は「炎」である。蜂起したサポイたちはまず牢獄を襲って囚人たちを解放し、そこに火を放った。ヨーロッパ人たちは兵士もその家族もすべて殺された。サポイと炎が多くのヨーロッパ人たちを滅ぼしたのである。メーラトの英軍兵舎に住んでいたあるイギリス夫人の手紙―

「バンガロー（周囲にベランダをめぐらした草や瓦でふいた屋根の平屋 [『新英和大辞典』] は私たちの周りで炎に包まれ、それが段々近づいてきました。そしてやがて、怒り狂った群衆が隣のバンガローまで押し寄せてきました。先日インドへ来られたばかりのチェンバーズ夫人という方が隣家のベランダにいるのが見えました。召使いたちに夫人を塀の低くなっているところからお連れするよう命じました。でも召使いたちも慌てふためいていたので、最初は私の言いつけに従いませんでした。隣家では最初に馬小屋が燃えだし、馬たちの鳴き声が聞こえました。それから群衆が隣家へ恐ろしい叫び声や怒鳴り声とともにやって来ました。入り口のドアが壊される音が聞こえ、たくさんの銃声が聞こえました。群衆がチェンバーズ夫人を連れ出そうとしたら、剣でひどく切られて事切れて床に倒れていましたと召使いが言いました。夫人は明日出産予定でしたのに。身の毛もよだつような恐ろしい夜でした。⁽¹³⁾

暴徒はチェンバーズ夫人の腹を切り裂き、胎児を引っ張り出したという（“The Indian Mutiny”）。チェンバーズ夫人の災難は反乱軍の残虐性を実際以上に大きく見せるレンズの役目をして、そのレンズを通してイギリス人たちはサポイを眺めるようになった。暴動の常だが火災と殺人は一緒にやって来る。

炎の隠喩によって、インド大内乱と『オードレイ夫人の秘密』とはつながる。ルーシーの「見たこともないような色をした火を燃やしたような肖像画」を眺めるロバートはそこに炎や火炎が描かれているように感じる―

彼女の深紅のドレスは、この絵に描かれている他のすべてのものと同じ

く誇張されて、彼女の周りに炎のように見えるひだを幾重にもつくって垂れていた。その赤く染まったドレスの中から彼女の美しい頭が突き出ている。それはまるで猛烈に火が燃えるかまどから突き出ているようだった。実際、深紅のドレスも彼女の顔の輝きも、髪が赤と金色に輝いていることも、すばめた唇の濃い紅色も、様々の鮮やかな色で詳細に描かれた背景も、すべてがひとつになってまず生み出すのは、決してその場にふさわしいとは思われないような効果だった。(71)

概してラファエル前派の作品は対象を誇張して描くが、ロバートの視点から描写されたこの場面もそれに負けずに誇張的である。繰り返し使われる赤と炎のイメージはオードレイ夫人の激しい感情の表象と理解できるだろう。だが、炎の中の女というイメージは、(コン) テクストを超えて広がり、インド大内乱に読者の想像力を飛翔させる。この隠喩によって、ルーシーは広義の他者として、狭義の「セポイ」として暗示される。

センセーション小説の主要な要素は殺人、重婚、変装、狂気であるが、センセーション小説の典型となったこの小説には、殺人が含まれていない。確かにジョージ・トールボイズは古井戸に落ちたが、ルーシーが突き落としたわけではない。彼が寄りかかっていた巻上機の、抜けそうになっていた「心棒」を彼女は引き抜いただけである(393)。しかも古井戸に落ちてジョージは死ななかつたし、ルークの死の原因はルーシーの起こした火事ではなかったと語り手ははっきり述べている—「酩酊するのが習慣になっていたので長期間健康が損なわれ、あの夜の予期せぬ恐怖で完全にだめになってしまった」(407)。もし裁判になったら、むしろジョージが不利になるのではないかという意見まである(Herbert 244)。古井戸の側でふたりが言い争っているときに、ジョージがルーシーの腕に残した「痣 (marks)」(88) に、後にロバートが気づく場面で、ルーシーは嘘をついてその場を取り繕うとするが、彼は「か細い手首をとて乱暴に掴んだ力強い手の4本指」(88) がその痣の原因だと推理する。これを考慮するとルーシーがジョージに対して取った行動は正当防衛と考えられるからだ。

ルーシーの無罪は別の marks、つまりルーク・マークスによって証明される。ルークとその妻フィービーは、ルーシーとジョージの古井戸の傍らでの言い争いの唯一の目撃者である。死の直前にルークがロバートに目撃したこと的一切を語ろうとする—

「奥様が見知らぬ紳士と歩いておられるのを家内が目にしたんですわ、その時ふたりはそれまで長いこと一緒だったようですが、とうとう—
「もういい、」とロバート・オードレイは大声で言った、「その先は知っているよ。」(493)

ブラッドンは巧みである。この先にルークが語ろうとした、ジョージの古井戸転落の顛末は、ロバートが話を遮ったことによって、語られないまま終わってしまう。ロバートがなぜルークの今際の告白を遮ったのか、ルークの告白はルーシーの無実を証明するものだったのか。すべては読者の解釈に任されることになるが、同時にそれによってロバートの「正義」にも疑問符が付くことになるだろう。Marksを消し去ろうとしても、遮ろうとしても、それは不可能なのだ。

ロバートの「正義」に基づく行動は個人的に正当化されるに過ぎないが、それもいとも簡単に、ジョージの自己犠牲によって覆されるということを指摘しておかなければならない。ジョージは最後まで彼の「妻」を愛していた。彼がロバートの前から姿を消したのが二度。皮肉にもその二度の失踪がロバートの疑念を引き起こし、ルーシーの過去を彼がたどることにつながったが、ジョージの「失踪」は二度ともルーシーを思っていたことであつた。ロバートはその彼の信頼を裏切ったのである。この点で、ロバートは社会的体面や肉親への愛情を友情に優先させたのである。彼の行動原理はジョージに対する友情であつた。しかし、それが最後に破綻するのである。彼の行動は、彼の言葉—「まず死者に正義をもたらせ、生きている者に憐れみを施すのはその次だ」(158)—とも矛盾する。ジョージが生きていたからには、彼は「正義」の行使を撤回すべきであつた。しかしそれを彼はしなかった。

そういうロバートだから、彼が「憐れみ」を口にするとき偽善の響きが伴う。彼は法廷弁護士であり、クリスチャンになったと言う。しかし、彼がルーシーに下す「宣告」には、正義も慈悲も見られない。自分の帰属する場所に対する忠誠だけが彼の行動を律している――

「しかし、あなたをここにいさせて、この場所をこれ以上汚させるわけにはいきません。あなたがかくも長い間騙してきた人の前で、自分がどのような人間か、本当は誰なのかを打ち明けないなら、そして彼と私から赦しを得ないなら（そういう赦しを差し上げようと思ってもいるのですが）、私はあなたの本性を証言できるあらゆる目撃者を集めて、あなたの本性を暴きます。たとえそれが私や私の愛する人たちに恥辱をもたらすことになっても、あなたの犯罪に正当で恐ろしい罰を加えるつもりです。」(345)

ロバートのこの言葉には嘘、少なくとも事実誤認がある。ルーシーはサー・マイケルを「長い間騙し」てはいなかった。それどころか、「彼女はとても若いから男を好きになったこともないだろう」(7)と求婚前にサー・マイケルは独り合点している。しかし、「私や私の愛する人たちに恥辱をもたらすことになっても」という言葉こそ本音であろう。これについては、コンスタンス・ケント事件にインスピレーションを得ながら、まったく異なった作品を生み出したブラッドンとシャーロット・ヤング（『審判（*The Trial*）』[1863]）を比較しながらスタロックが詳細に論じている。彼女によれば、「ヤングは注意深く、センセーション小説と連想され、評判を落とすような、家庭生活への侵犯について書くことを注意深く避けた」(75)。ロバートの注意深さはヤングのそれと同じである。正義でもなく、慈悲でもなく、恥辱こそが彼（や英国国教会の敬虔な信者でオクスフォード運動を熱烈に支持した保守的なヤング）の最も恐れることだった――「私が最も恐れるのはこのことが公になってしまう羽目に陥ることこと、そして恥辱です」(380)。かれのルーシーに対する「懲罰」は「正当な罰」ではなく、私刑^{リンチ}であった。その意味ではこれを「私的な解決策（private solution）」(Chase and Levenson 208)と見るのは妥当である。

ロバートの「正義」にイギリス人のセポイに対する「正義」を響かせると、それが新しい、異なった意味合いを帯びてくる。「正義」を共通項として、ロバートと大英帝国を重ね合わせると、ブラッドンのイギリス社会の道徳規範に対する批判的な態度がうかびあがってくるのである。既に引用した南北戦争についての語り手の考え、「北部諸州の人たちは殺したり殺されたりしているが、そんな時にも怒りで荒れ狂う北部人が南部人の胸に飛び込んで赦したり赦されたりしてほしいと思わざるをえない」(292-3)という言葉の前にはナポレオン戦争でのイギリスとフランスの敵対関係への言及がある――

イギリスとフランスは憎しみあい、殺し合い、ありふれた表現を使うと、徹底的にやり合った仲だ。それでも今ではお互いに抱き合って、永遠の友情と末永い兄弟愛を誓うことができる。(292)

過去に憎しみあい殺し合った人たちが後に友情や兄弟愛で結びつくという歴史に学べと語り手は書いているようである。注意すべきはここには正義という概念が介入していない。というよりも、正義など最初から存在していないのではないか。そもそもふたつの国が戦うときに、どちらに正義があるのか。ロバートの正義もイギリスの植民地に対する正義もその先に友情や兄弟愛が期待できない種類の「正義」である。一方が他方を批判し、断罪する、という種類の正義である。語り手は「正義」を振りかざすロバートと距離を置いているということがここで明らかになる。

破綻したとはいえ、ロバートの行動原理は、ジョージに対する友情として、テキストの最後の場面でも継続している。それが安定的かどうかの保証を、しかし、語り手は与えていない。男は全面的にアイデンティティを支えてくれる存在を社会的な支配体制（国家、階層システム、法律）に求める傾向がある。「探偵」の行為はそのようなイデオロギー的な風土によって設えられた規範や制度を正当として、その基準が彼の行動を支える。「探偵」ロバートの行動はその好例である。しかし、これらは強固な一元的アイデンティティを与えてく

れるが、それは時間的にも空間的にも限定的である。このテキストでは最後に近い場面にその暗示がある――

オードレイ館は閉じられて、ひとりのしかめ面をした年寄りの門番がこの館の主人として君臨している。この屋敷ではオードレイ夫人の笑い声が音楽のように聞こえたものだったが。彼女をモデルにしたラファエル前派風の肖像画にも覆いが掛けられた。アクエルマンやプーサンやコイプやティントレットの作品には画家たちが恐れるあの青カビが生えている。主の准男爵には知らせずに、物見高い訪問者にオードレイ館は公開されることがしばしばある。訪問者たちはオードレイ夫人の私室で感嘆の声を上げ、外国で死んだ金髪美女についてあれやこれやの質問を投げかけるのである。

(446 強調は引用者)

社会的な支配者を象徴するオードレイ館は閉ざされ、その時間的継続性の限界が暗示される（「叔父が死んだらオードレイ館はどうなるのだろう」というロバートの自問に対する回答）。一方、そこへの侵入者であったオードレイ夫人は引き続き関心の的である。一元化された社会でこそその存在意義を持つカントリー・ハウスと、それが象徴する貴族の権威はこの時点で廃棄されているのである。

プロットの終幕の時点が1861年に設定されているのを無視してはいけない。ラファエル前派の結成からのメンバーであったジョン・エヴァレット・ミレイが前派を去ったのが1860年で、その後ラファエル前派はその活動を停止したから、1861年にはその運動に「覆いが掛けられた」というのは正確である。ここでも（コン）テキスト外の事件をほのめかすことによって、このテキストの描く出来事の同時代性を読者に強く意識させている。アクエルマンからティントレットまで、引用で挙げられている画家はいずれも古典派以前の画家で、ここで再び語り手は、オードレイ館の文化的混沌に読者の目を向けさせるとともに、多元的なアイデンティティのありように注意を向けさせる。テキスト内でははっきりと述べられていないが、古典派の絵画ばかりを揃えていたオード

レイ館にラファエル前派の作品を取り入れたのはルーシーではないかという推定も成り立つ。一方で、アイデンティティの多元化に男は女よりも耐え得ない。そのために男は既得権を防波堤に女が支配体制へ侵入するのを防ぎ、混沌の原因を排除しようとする。センセーション小説としての『オードレイ夫人の秘密』はそのような現実を描いて饒舌である。

多元的なアイデンティティを象徴するオードレイ夫人は死後も関心の的であるという記述は注目に値する。センセーション小説の直接の「祖型」であるゴシック小説の特徴のひとつは、過去に発する秘密が全部暴かれられない限り、過去はその力を失わないことだからだ (Williams 72)。そう、オードレイ夫人の秘密はすべて暴かれたわけではないのだ。そのことはテキスト内で予言されている—「あの方がどのような秘密を持っておられようとも、それは永遠に秘密のままでしょう」(381)。権威や支配的なイデオロギーに忠実なモスグレイヴ医師のこの言葉は複数の解釈を許す。彼はオードレイ夫人の秘密を閉じ込めることが可能だと考えてこの言葉を発したが、むしろ彼の考えに反して、彼女の秘密は何人にも解き明かすことができないという意味として理解することが妥当であろう。『オードレイ夫人の秘密』が読者の前に登場してから、ほぼ150年の間、様々に読まれ、様々に解釈されていることでそれは証明されている。「無謀にもひとりでその秘密に分け入ろうとするなら、自分の居場所も分からなくなってしまう家」(2) というテキストの開始早々、読者をオードレイ館に誘う言葉は、このテキストの秘密に誘われる読者に対する警告として読むことができる。『オードレイ夫人の秘密』というテキストの秘密を暴こうとするのは無謀な試みで、うっかりするとテキストの迷宮に迷い込んで抜け出せなくなる。オードレイ夫人が秘密を生成し続ける限り、『オードレイ夫人の秘密』というテキストも読み継がれるだろう。⁽¹⁴⁾ オードレイ夫人の秘密とは、それを解き明かそうとする人 (ロバートを含む) にもついに解き明かせない秘密なのだ。



「正義」というタイトルが付けられた1857年9月12日発行の『パンチ』誌の挿絵。ブリタニア（イギリスの守護神）がインド人たちに正義の刃を振るう。悲しみ絶望するインド人の女性たちとブリタニアの怒った（「正義」の怒り？）顔の対比に注目。ブリタニアは着衣も肌の色もあくまで白く、一方のインド人たちは色黒に描かれて、対比を強調している。

注

- (1) 現在広く用いられている『オードレイ夫人の秘密』はオクスフォード版（1987）である。本論文でもこれをテキストとして使用した。これが厳密なテキスト校訂を経た最初のテキストであることはこの作品の評価の歴史を如実に物語る。『オードレイ夫人の秘密』の再評価は Elaine Showalter, *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing* (Princeton UP, 1977) をその嚆矢とする。彼女の Gynocriticism が広くおこなわれるようになって（第二波のフェミニズム）それまで真面目な研究対象とは見なされず、無視されていた女性作家の作品（ゴシック小説やセンセーション小説を含む）が研究対象となり、大学の正課で取り上げられるようになった。『オードレイ夫人の秘密』の研究史に限定すると、男性規範に挑戦する女性に力点が置かれていた時期を経て、1990年代からはロバート・オードレイに焦点が当てられるように

なった。彼の表象するジェンダー・ステレオタイプを分析することによって、その先にあるジェンダー・イデオロギーの問題点を明らかにする研究が陸續と発表された。その代表は Richard Nemesvari, “Robert Audley’s Secret: Male homosocial desire in *Lady Audley’s Secret*” *Studies in the Novel* 27. 4 [1995] である。『オードレイ夫人の秘密』の研究書と論文の書誌は “Scholarly Secondary Criticism” や “Some Suggested Sources for *Lady Audley’s Secret*” に手際よくまとめられている。

- (2) “Blackmore Local History” と “Mary Elizabeth Braddon” を参照。
- (3) ブラッドンの伝記は Carnell に基づいている。
- (4) 「アルゴス号」は現在観賞用の絵として残されている。その説明書きは次の通り—「アルゴス号についてはほとんど知られていないが、乗船券には高速であることをアピールして、乗客を引きつけるべく、『高速のイギリス船』と書かれている。『マルセイユ行きの中立船』と書かれている乗船券もある。これは重要なことで、アルゴス号がアメリカ独立戦争中に航行していたことを示すからである。おそらくフランス船籍で船荷や乗客をフランスへ運んでいたのであろう。中立船であったことと高速であったため、(イギリス軍に邪魔されることもなく＝引用者注) スムーズな航海ができただろう」 (“Nautical Antiques and Marine Art”)。快速帆船は「風任せ」のために、予定通りの運航ができないという欠点があったので、1850年代の後半から就航した蒸気船に押されて次第に客船としての利用価値を失った。
- (5) “The Ships List”によれば、「ヴィクトリア女王」号は739トンの大きさであった。1855年7月25日にプリマスを発ち、11月13日にアデレードへ着いている便は、3ヶ月半の航海であった。『オードレイ夫人の秘密』では、シドニーからリバプールまで「3ヶ月」(13) だとジョージが語っている。1859年から61年にかけてメルボルン (ヴィクトリア州) に12隻が到着したが、リストから83日から112日を要したことが読み取れる。他の移民船の例では、天候などを考慮すれば、ここでもブラッドンの数字は正しい。283人の乗客を乗せた「女王号」のこの航海中に3人が生まれ、4人が死んでいる。死因は天然痘、癆 (ろう、やつれ)、気管支炎、発疹チフス。天然痘や発疹チフスは、現在では発症者のいない、しかし当時は感染症として猛威を振った病気である。移民船には原則として医師が乗船することになっていて、この航海でも医師が乗っていた。ひとりを除き、全員が水葬されている。墓地に葬られたひとは、(不幸中の幸いと言うべきか) 到着する直前に亡くなったのであろう。搭乗者には家族よりも、男女の単身者が圧倒的に多く、そのほとんどが職業を男は「労働者」女は「召使い」と申告している。ジョージ同様、男たちは「新世界での運試し」(21)。ジョージの話し相手のモーリー嬢と同じく、女たちのなかには結婚資金作りのために植民地へ向か

った人もいたのだろう。船室は3等級に分けられていたが、職業を基にした「クラス分け」であった。一番船賃の安い等級Ⅰには農業労働者、羊飼、牛飼、女中、それより少し高いⅡには鍛冶屋、レンガ職人などの職人が割り振られている。この時代の人々には、陸上の社会階級が海の上でも適用されたのである。

- (6) Montwieler を参照。この時代の消費者文化と伝統貴族の関係の興味深い点は、伝統貴族は通常「生産」に関わっていなかったことだ。彼らは主に地代によって生活を維持していた。オードレイ家はその典型であった―「サー・マイケルは読書や物書き、地所の経営の手はずを整えるために執事と相談することを好んだ」(280)。ルーシーはそういう貴族の生活に中産階級の消費者文化を持ち込んだという点でも、伝統的価値観を攪乱したと言ってよい。『オードレイ夫人の秘密』の主要登場人物―ジョージの父親のハーコート・トールボイズ(「地主のトールボイズ様」と呼ばれている [180]) は貴族ではないが農場を経営し、アリシアが結婚することになるハリー・タワーズはハートフォードに大きな地所を持っている。伝統的な土地所有者階級(穀物法 [the Corn Laws] の維持に賛成して、ロバート・ピールを支持した人たち)と労働者階級の織りなすドラマがこの小説で展開する。

- (7) この論文ではセジウィックにならって、「愛」(love)ではなく「欲望」(desire)を使った。その意味も彼女の「情緒のあるいは社会的な力、換言すれば、(愛情以外にも) 敵意であれ憎しみであれ、それほど強い感情でなくても、それが形を取ると重要な人間関係をつくる接着剤となるもの」(2) そのままである。

- (8) “The Ships List”によれば、この年、「デヴィッド・マルコム」号が167名の移民を乗せて1847年1月にアデレードへ到着している。

- (9) “The Female Middle-Class Emigration Society”による。

- (10) 環境(産業革命の影響で不衛生だった都市と田園地帯)や地域や職業で違いがあるが、“Straight Statistics”はリーズ、リバプール、ニューカースルの3都市とイングランド/ウェールズの1851年から61年の平均余命を、それぞれ34, 27, 34, 42年としている。スタフォードシャーのコルトンという村の資料では、この地域の職業別の平均余命をすることができる。それによれば、一番長命の郷紳と専門職が38年、最も短命の職人・商人・農民のグループが20年で、残りのグループ(労働者、召使い)が25年、平均25年であった。この村の資料は、あの「有名な」オーウェン・チャドウィックの調査資料を基にしている(“Victorian Health”)

- (11) Marx, “The Revolt in the Indian Army.”

- (12) 例えば、インド大内乱の影響としては、イギリス国民が「悪魔にとりつかれたようになった(diabolical possession)」ことと「懲罰、報復(retribution)」

や「正義 (justice)」という言葉が日常的になったことがあげられる (Herbert 19以下、99以下)。一般的な表現である punishment ではなく、聖書に使われる retribution が好まれた点に、イギリスの植民地支配をイギリス国民が正当化していたことが表れている。このような国民的熱狂からやがて jingoism 「好戦的愛国主義、盲目的愛国主義」という単語が生まれる。この単語の初出は1878年、「1877-78 年の露土戦争当時流行の俗謡の折り返し、“We don’t want to fight, but by Jingo! ...” に由来する」(『新英和大辞典』)。ロバートのルーシーに対する執拗な報復は国民的熱狂を個人的な熱狂に置き換えたものと言ってもよい。実際、彼は「正義」という言葉を頻繁に使い、彼の行動の正当化を図っているように見える(345)。自分の行動が「正義」だという根拠を示さずに。

- (13) 著者不詳の『インド大内乱の物語 (*the Story of Indian Mutiny*)』35。この「物語」は半世紀近く版を重ねて、よく読まれた。
- (14) クララの “I am of age; *my own mistress*; *rich*, for I have money left me by one of my aunts;” (199) はジェイン・エアの “I told you I am independent, sir, as well as *rich*: *I am my own mistress*.” (458 強調は引用者) の響きである。ふたりはつながって、それによって欲望するヒロインの連続性を証明している。その意味で、ショーウォルターの「センセーション作家は激しい感情と断固とした行動を評価した。彼女たちは自分たちをジョージ・エリオットではなくシャーロット・ブロンテの娘だと考えていた」(154) という評価は妥当である。ロバートはクララの物静かな表情の下に「激しい感情と断固とした行動」が存在すること読み取ることができなかった。ブラッドンはシャーロット・ブロンテを尊敬していたそうである。ブラッドンは、欲望するヒロインであるジェイン、狂女のバーサ、美貌の金髪で実利主義者のブランシュ・イングラムをひとりの人物として描き出した。

Works Cited

“Blackmore Local History.”

http://68.142.243.205/search/srptcache?p=mounntnessing+essex+lady+audley%27s+secret&fr=yfp-t-903-s&ei=UTF-8&u=http://cc.bingj.com/cache.aspx?q=mounntnessing+essex+lady+audley%27s+secret&d=4687400064516537&mkt=en-GB&setlang=en-GB&w=PvU2JZPH_E5TIS2ir1SozeqCcuqaeJTg&icp=1&intl=uk&sig=lcXG6ytJ_8lrajTqjbooFQ--. Web. Aug. 23, 2016.

Bowlby, Rachel. *Just Looking: Consumer Culture in Dreiser, Gissing and Zola*. New York: Methuen, 1985. Print.

Braddon, Mary Elizabeth. *Lady Audley's Secret*. 1861. Oxford World's

- Classics. Ed. and introd. David Skilton. Oxford: Oxford UP, 1987. Print.
- , *Lady Audley's Secret*. Broadview Literary Texts. Ed. and introd. Natalie M. Houston. Peterborough, Ontario: Broadview P, 2003. Print.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. 1847 Ed. and introd. Margaret Smith. Oxford: Oxford UP, 1980. Print.
- Carnell, Jennifer. "The Literary Lives of Mary Elizabeth Braddon: A Study of her Life and Work." <http://www.sensationpress.com/literarylives.htm>. Web. Aug. 23, 2016.
- Chase, Karen and Michael Levenson. *The Spectacle of Intimacy: A Public Life for the Victorian Family*. Princeton: Princeton UP, 2000. Print.
- Collins, Wilkie. *The Woman in White*. 1861. Oxford World's Classics. Oxford: Oxford UP, 1996. Print.
- "Conjugal Conditions of the People." *Vision of Britain*. http://www.visionofbritain.org.uk/census/SRC_P/6/EW1861GEN. Web. Sept. 18, 2016.
- Daly, Suzanne. *The Empire Inside: Indian Commodities in Victorian Domestic Novels*. Ann Arbor: U of Michigan P, 2011. Print.
- "1882 Married Woman's Property Act." *Spartacus Educational*. <http://spartacus-educational.com/Wproperty.htm>. Sept. 19, 2016.
- "Female Emigration to Australia." *Victorian Contexts*. <http://victoriancontexts.pbworks.com/w/page/31222930/Female%20Emigration%20to%20Australia>. Web. Sept. 18, 2016.
- "The Female Middle-Class Emigration Society." *Exodus: "Movement of the People."* <http://www.exodus2013.co.uk/the-female-middle-class-emigration-society/>. Web. Sept. 18, 2016.
- "Gunpowder Tea." *British History Online*. <http://www.british-history.ac.uk/no-series/traded-goods-dictionary/1550-1820/gudgeon-gunpowder-tea>. Web. Sept. 20, 2016.
- Herbert, Christopher. *War of No Pity: The Indian Mutiny and Victorian Trauma*. Princeton: Princeton UP, 2008. Print.
- "The Indian Mutiny." *The British Empire*. <http://britishempire.co.uk/forces/armycampaigns/indiancampaigns/mutiny/mutiny.htm>. Web. Sept. 18, 2016.
- Marx, Karl. "The Revolt in the Indian Army." *New-York Daily Tribune*, July 15, 1857. *Marx Engels Archive*. <https://www.marxists.org/archive/>

- marx/. Web. Sept. 1, 2016.
- “Mary Elizabeth Braddon.” *ISSUU*. <https://issuu.com/fryerningfolio/docs/meb-text>. Web. Aug. 23, 2016.
- Montwieler, Katherine. “Marketing Sensation: *Lady Audley’s Secret* and Consumer Culture.” *Beyond Sensation: Mary Elizabeth Braddon in Context*. Ed. Marlene Tromp, Pamela K. Gilbert, and Aeron Haynie. Albany: State U of New York P, 2000. 43-61. Print.
- “Nautical Antiques and Marine Art at Land and Sea Collection.” <http://landandseacollection.com/id402.html>. Web. Spt. 2, 2016.
- Rodu, Brad. “Swedish Tobacco Use: Smoking, Smokeless, and History.” *Health Facts and Fears Com.* <http://www.tobaccoharmreduction.org/rodu/Swedish%20tobacco%20use.pdf> Web. Aug. 28, 2016.
- Said, Edward. *Culture and Imperialism*. New York: Vintage, 1998. Print.
- “Scholarly Secondary Criticism on Braddon.” *Mary Elizabeth Braddon*. <http://maryelizabethbraddon.com/bibliography/scholarly-secondary-criticism-on-braddon/>. Web. Aug. 20, 2016.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985. Print.
- “The Ship List.” <http://www.theshipslist.com/ships/australia/victoriariaegial855.shtml> Web. Aug. 25, 2016.
- Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing*. Princeton: Princeton UP, 1977. Print.
- “Some Suggested Sources for *Lady Audley’s Secret*.” www4.ncsu.edu/~leila/documents/LadyAudleybiblio_006.doc. Web. Aug. 20, 2016.
- “Story: Rye, Maria Susan.” *Te Ara: The Encyclopedia of New Zealand*. <http://www.teara.govt.nz/en/biographies/1r22/rye-maria-susan>. Web. Sept. 19, 2016.
- The Story of Indian Mutiny (1857-58)*. Edinburgh: W. P. Nimmo, Hay and Mitchell, 1898. Open Library. <https://archive.org/details/storyofindian-mut00edinrich>. Web. Sept. 22, 2016.
- “Straight Statistics.” <http://straightstatistics.fullfact.org/article/bad-victorian-times>. Web. Sept. 19, 2016.
- Sturrock, June. “Murder, Gender, and Popular Fiction by Women in the 1860’s: Braddon, Oliphant.” *Victorian Crime, Madness and Sensation*. Ed. Andrew Maunder and Grace Moore. Farnham: Ashgate. 74-88. Print.

Tomaiuolo, Saverio. *In Lady Audley's Shadow: Mary Elizabeth Braddon and Victorian Literary Genres*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2010. Print.

"Victorian Health." Colton Historical Society.

<http://www.coltonhistorysociety.org.uk/sickness-Vict.php>. Web. Sept. 19, 2016.

Williams, Anne. *The Art of Darkness: A Poetics of Gothic*. Chicago: U of Chicago P, 1995. Print.